

ミュージカルフィットネス DanSing

「サムとルナ」

企画：高木 愛澄

脚本：重野 悠

音楽：米内山 美里

株式会社 Feel&Release
ワオン・ワークス 株式会社

ストーリー

一夢を巡って交錯する2人の人生を描いた物語。

アメリカの田舎町、春の日差し降り注ぐ川辺にサムとルナはいた。幼い二人は、将来の夢を語り合う。サムはジャズダンサー、ルナはシンガーになることを夢見た。その約束は、時を経て大人になり、2人離れた後も互いの心に持ち続けていた。サムはコンクールに挑戦し、見事入選を果たした。地元紙の一面でそれを知ったルナは連絡を取り、久しぶりに会うことになった。二人の会話は子供の頃のまま無邪気で、二人は恋に落ち、結ばれることとなる。その後も、お互い夢を追い、サムはブロードウェイミュージカルの配役に抜擢される。一方でルナは一向に振るわず、引退を決意する。これまでの努力を見てきたサムはこれに反対するが、自身の考えを否定したサムの気持ちをルナは理解することができず、出ていってしまう。二人は夢を求めて、別の道を歩みだす。

登場人物

- サム※（5～27歳） ジャズダンスを極める男性。内気な性格である一方、ダンスをする時には大胆で豊かに表現する。
- ルナ※（7～29歳） 「多くの人に歌を届けたい」と夢を持つ女性。パワフルな声量を活かしたバラードが得意。後期は楽曲制作に励み、シンガーソングライターとして活動する。

※サム…Samsonの愛称。太陽の人。※ルナ…月。月の女神。

・箱書き

シーン	人物	概要
メイン1 「これが私の」	サムとルナ	一つのテーマソングで2人の成長を紡ぐ 幼少期：お互いの夢を歌い合う 少年期：二人の夢は深まってゆく 青年期：離れても夢を追いつける
メイン2 「夢の灯火」	ルナ	インディへ出版するも振るわず、大手のレーベルへ行けば、怪しいモデルの仕事の勧誘。ライブを開いても空席ばかり。 ルナ「夢を諦めようか」
メイン3 「愛の光」	サムとルナ	サムのコンクール入選をきっかけに再会する二人。あの頃の時のまま無邪気に語り合い、恋をし、二人は結ばれる。
メイン4 「離れる心」	サムとルナ	稽古に明け暮れるサムと、一向に振るわないルナ。「夢を諦める」決心をしたルナに猛反対するサムだが、意見が食い違ったまま、二人は離れてゆく。
クールダウン 「太陽と月」	(ルナ) サム	別れて5年後、ルナはアーティストとして成功を納めていた。サムは彼女のライブを観に行くが、終演後ルナと面会することなく帰路に着く。「前を向いて進もう」彼女との日々を胸に大切にしまいながら、サムは帰路についた。

・歌詞

1. メイン1「これが私の」

(背景) (アメリカの田舎町。子供の“サム”と“ルナ”は互いに夢を語り合っていた。)

ルナ 心を照らす
光を感じるの
歌えば 世界が晴れ渡る
これが 私の夢

(背景) (少年になり、深まる夢を、なお語り合う二人)

サム 夢を抱けば
太陽 高く昇るんだ
ダンスは 心を弾ませる
これが 僕の夢

サムとルナ 手を広げ 日差し受け止め
夢を彼方へ 届ければ
空は青く 道を照らし
僕らを導いてくれる

(背景) (大人になった二人。離れた後も心通う)

サムとルナ 心に刻む 二人の熱い想い
さあ 歩き続けよう
あなたは今も
夢を持ち続けていますか

2. メイン2「夢の灯火」

(背景) (楽曲は売れず、レーベルにも採用されず、夢を追い続けてきたルナは、すっかり疲れ果てていた。)

ルナ あの日 心照らした夢
 赤く染まり 夜が迫る
 目を凝らしても
 道は闇に消えてゆく

 彼と誓った 夢の灯火
 雨に打たれ 冷やされる
 心の傷跡 剥がされ続け
 癒せず 騙し歩むだけ

 拭いても 溢れる涙
 わたしの心 溺れ
 もがく力も 尽き果てて
 命消えゆく あの日の想い

 夢に 裏切られ
 悲しみに うちひしがれる
 夕暮れ 海に溶け沈み
 月明かりすら 届かない

 もうやめようか
 わたしの夢

3. メイン3「愛の光」

(背景) (国際コンクール優勝者がサムであることを地元紙で見つけたルナ。連絡すると、彼とバーで再開することに。空白が無かったかのように2人の会話は弾む。)

ルナ 彼の声 笑顔 仕草
あの時と変わらない
夢追う あなた
胸の高鳴り 戻ってくる

今夜 星が輝いて
未来 紡ぎ描かれる
あなたがくれる温もり
ただ 感じていよう

サム あの頃の 二人のこと
思い出し 気づいた
彼女のことが こんなにも
心の中で 輝いてたこと

君の瞳の光浴びて
僕の心 癒されてゆく
今は穏やかなリズム
ただ 感じていよう

サム・ルナ 不意に 静けさ訪れて
二人だけの世界
あなたの香り 高まって
心の声に 身を委ねよう

溢れゆく 愛の光
ただ 見つめていよう

4. メイン4 「離れる心」

(説明) (2人が交際して5年。サムは大きな舞台の出演が決定するが、ルナに縁はまだ来ない。サムの初演の夜、ディナーを振る舞うルナ。彼女は決意を伝える。)

ルナ わたし決めたの
夢諦めようと
あなたと子供を授かって
次の舞台へ進みたい

サム だめだ 分からない
努力 無駄にするな
続けてさえいれば
僕を試してみろ 夢は叶うんだ

ルナ わたし 十分チャレンジし続けた
諦めたいの
夢追うあなたの
支えになるため

サム 今の僕がある理由
それは他人の為に
努力をしたこと
ルナは自分が一番
褒められたかっただけだろう
人のため 生きてみろ
きっと道が 見えるはずだ

(背景) (ルナは自分の全てを否定された気分だった。自分勝手に夢を追いかけていたつもりは一切ない。ただ、彼の言葉はナイフのように心に突き刺さった。)

ルナ 努力が報われるのは
ほんの僅かな人だけ
あなたの今があるのは
運命がそうさせただけ

サム 僕を逃げ道にするのは やめてくれ
今の君は 自分勝手
そんなやつとは
家族になんてなれない！

(背景) (沈黙が続いたあと、ルナは涙が溢れる寸前で立ち上がる。)

サム ルナ！

(背景) (ボタンと扉を閉じ、嵐の中、傘もささずに彼女は出て行った。)

5. クールダウン「太陽と月」

(背景) (5年後、サムはライブハウスを訪れていた。ステージにはルナの姿が。席は完売し、客は明らかに彼女の音楽を愛している様子だった。ルナが歌うのは、幼少期に口ずさんだ、あのメロディだった。)

ルナ 心を照らす
光を感じるの
歌えば 世界が晴れ渡る
これが 私の夢

(背景) (終演後、お互い会うことはなかった。ルナには家庭があったのだ。雨上がりの道を歩くサム。)

サム 夜空に輝く 沢山の夢
俯き歩けば 見えるはずもなく
焦り進んだ 濡れた道
地面に映る星
気づき 見上げてみれば
彼方 手がもう届かなくて

夢は 心に光を与え
必ず道を照らしてくれる
紡いだ星を 心にしまつて
前を見つめよう

夜明けが 心を照らし
濡れた道を 乾かしてゆく
一歩ずつ 踏み出そう
陽はまた必ず 昇るから

太陽と月のように
人は出会い別れてゆく
運命に身を委ねて
さあ 旅を続けよう

たとえどんなに暗くても
かすかな光が 照らしてくれる
目を凝らして 道を見つめ
ゆこう 夢を信じて

(おわり)

「付録」

① 「メイン1」歌へ繋がる二人の会話

「ルナの夢は何？」

右頬にバンドエイドをつけた5歳の男の子”サム”が尋ねる。

「歌が好きなの」

女の子は2歳年上で、サムと国立公園へ遊びに来ていた。

「サムは？」

「ジャズが好き」

サムはしゃがみ込んで草をいじりながらぼつりと答えた

「へー、何を弾くの？」

「違うよ、ダンスの方」

「女の子みたい」

サムはさらに顔を俯かせた。

ルナは悪気こそなかったが、その様子を見て提案をした。

「じゃあわたし歌うから、それにぴったりのダンスを作ってよ。」

「いいよ」

サムはまた小さな声で言うと立ち上がった。

(メイン1へ繋がる)

② 「メイン4」シーンの背景

サムが帰った時、目に飛び込んだ光景に、疲れた表情が一気に晴れ渡った。

テーブルにぎっしりと並べられたディナー。

今日はサムのダンスミュージカルの初演日で、その祝いにルナが準備をしていたのだ。

キスを軽く交わした後、テーブルにつき、シャンパンで乾杯をする2人。

食事を進めながらサムが今日の様子を語る。

音響が悪い。照明のタイミングがひどい。共演者がミスをした。

サムにしては珍しく、ネガティブなことばかり並べられた。

ルナは少し心がざわつきながらも、疲れているからだと思い、話題を切り替えた。

ルナ「わたし、もう引退しようと思うの」

サムはフォークを置くと、ステーキが残った口で、彼女の目を見ぬまま

「だめだ」と一言。

「僕を見ても、夢は叶うんだ」
「でも、ちっとも楽しそうじゃない」
ルナは続けた。
「私は何年もチャレンジを続けた。その結果が今なの。私はただ、頑張るあなたの支えになりたい」
「僕はまだ夢半ばなんだ。家族を持つのは、もっと大きな舞台に立ってから。」
サムは続けた。
「僕は人に喜んでもらうために頑張りを続けた。だからこの結果がある。ルナは褒められたくてやっていただけだろう。人のために思って頑張ってみるんだ。」
ルナは自分の全てを否定された気分だった。自分勝手に夢を追いかけていたつもりは一切ない。ただ、彼の言葉はナイフのように心に突き刺さった。
「努力をしても報われる人はごく僅かなの。あなたはその一人になれただけ。」
ルナは鼓動が強くなっていくのを感じた。サムの手は小刻みに震えていた。
「僕を逃げ道にするのはやめてくれ。君と家族として落ち着くつもりはない！」
彼は叫んだ後、永遠にも感じられる沈黙が続いた。
ルナは涙が溢れる寸前で立ち上がる。
「ルナ！」
彼女はそのまま、嵐吹き荒れる外へ出て行った。

以上